

本文61行、夕字20字  
ア元ヲケイニ因ル

15 8

23  
23

内 部 中 心

柳田光記の詩法

海と貝殻の境

殿内書齋

45

59

柳田光記さんの詩集「海と貝殻」の境をた  
 いそう響く味深く読んだ。柳田さんの詩はいつ  
 も事象の極限にたつて発想されいて、中途  
 半端な作爲はまったくみられぬ。この詩集  
 は「I 海の境」「II 貝殻の境」「III 之ヤボン  
 の境」の三部で構成されているのだが、そ  
 のIの章をみると「海」「時間と空間」「星  
 座・星雲」「山岳」「氷壁」「断崖」「峠」  
 「雪原」など巨大なスケールの素材が思考の  
 極限的な地点でとらえられ、幻想的な心象の  
 把握もまた極点的である。その思考と感覚と  
 幻想は、いふなれば放射的拡散的なイメージ  
 をおびているにしかかかわらず、一篇ごとにそ  
 の詩をみていくと、たとえは、薄明の海の中に